資本主義社会と物神性

ゼミナール

１．現代の資本主義社会は、新商品が加速的に開発され、商品世界は飛躍的に拡大し、商品種類は複雑になり、数も増えている。その意味では、物神性が深まっている。

商品生産の社会的分業が量的にも増大し、

質的にも深化する。私的労働は拡大し、商品数は増え、商品交換による私的労働の社会的労働への転化も拡大する。

例えると、熊本でテレビをつくるA君と

北海道でバターをつくるB君がテレビとバターを交換することにより、二人は社会的関係を取り結ぶと人間の目には映る。

２．議論をすすめる前提を押さえる。その展開は、

1. 資本主義的商品生産は，互いに独立して営まれる私的生産である。商品を生産する労働は私的労働である。
2. しかし、私的労働も、全体としては社会的労働なければならないし、社会的分業を形成しなければ社会は成立しない。
3. 私的労働は商品交換を通して本来あるべき社会的労働となる。
4. 資本主義社会とは、商品と商品の社会的関連を通して、はじめて人と人との社会的関連が言える社会である。

３．物神は「魔力」をもっている。単なる人間の手の生産物が「超能力」をもっていると信じられている。お守り（成田不動さん－交通事故から免れ…）薬師像（東大寺大仏殿－人間の病気をなくす）には、原生的なご利益があるとされる。

物神性の秘密をとくカギは、労働生産物の商品形態そのものにある。諸商品は生まれつき、不思議の魔力をもち、社会的関係を取り結ぶように人間の目には映る。を考えれば明白。金はキラキラ輝き、神秘的で、何やら神々しい。金は物神だと錯覚する。

単なる労働生産物にすぎない商品が、そ

れ自身生命を与えあられ、その自然的属性によって、全面的な社会的関係をとりむすび、あたかも物神であるかのように見えることが、商品の物神的性格である。

これは労働生産物が商品形態をとることによって生じるのである。

4. 社会的関係を取り結ぶ秘密は、商品を生産する労働の特有な社会的性格にある。

①孤立的に営まれる私的労働である。

→原始社会は最初から社会的労働、共同労働である。村の長が必要量を経験的に知っており、村人の労働を計画的に分割する。労働は最初から共同的、社会的である。

②資本主義的商品生産社会においては、労働はじめから私的労働である。

→だが、まったく私的労働にとどまっていれば、生きるための物が調達できず、社会が存続できない。社会的関連をもたなければ社会的分業が成立しない。

③私的労働は全体として社会的総労働、社会的分業を形成する。

→社会的総労働になるのは、商品交換を通じてである。

5. A君、B君の私的労働と社会的関係

社会的分業の一環をなし、社会的労働と

なる。A君、B君の私的労働の社会的関係は、直接取り結ぶ関係としてではなく、むしろ物と物との関係として現れる。生産者たちの私的労働は、二重の社会的性格をもっている。

❶具体的有用労働として－社会の欲望をみ

たし、総労働の一環、社会的分業の自然発生的体制の一環でなければならない。

❷抽象的人間労働として特殊な有用な私的

労働が交換される。等しい。つまり、両方の労働は抽象的人間労働であり、これも社会的性格のものである。